健康リスクマネージメントにおける「社会構造」と「文化」
―日本予防医学リスクマネージメント学会(JSRMPM)の発足に寄せてー

杉下智彦　(Tomohiko Sugishita, M.D., M.P.H.)
Medical Anthropology
School of Oriental and African Studies, University of London

１．はじめに―リスクと世界システム

９月１１日米国同時多発テロ。リアルタイムで伝えられた悲劇の主人公は、つい３ヶ月前に家族と間近に見上げた WTC であった。それは信じ難い光景だった。時折発せられる低く押し殺した実況アナウンスの声が、事態の深刻さを暗に物語る。この卑劣な破壊行為は、ひとつの犯してはならない聖域を突き抜けたように思えた。私は、裂けながら崩壊する巨大ビルに驚愕しながら、それまで信じていた価値観が音も無く崩れ去るような錯覚を感じていた。それは、自分自身のコスモロジーと他者のコスモロジーの相互理解における、決定的な齟齬と限界を確認したからなのかもしれない。

９・１１の惨劇は、私がリスクの中に住んでいること、そしてリスクが全く予期しない形で現れることを改めて考えさせてくれた。これは阪神大震災のような自然災害とは趣を異にしていた。目に見えないリスクと言う蜘蛛の糸でつながっている現代社会の光と影。グローバリゼーションと言う市場経済の至上性と西洋的な理性の主座のあり方によって、アジアやアフリカの辺境に住む人々でさえ、無意識のうちにこの世界システムに組み込まれている。そしてこのシステムは、物質的な富をもたらす一方で、匿名的、無差別的なリスクをも瞬時に伝達していく。崩壊の象徴は、図らずも、人々の声を権力的構造の中に隠蔽している現在社会の影の部分を浮き彫りにした。正義と悪の二分論は、常に制度と言う権力に魅了されている。西洋的覇権による間接的なリスクと権力の隠喩が、アフリカの小さな街で差別や暴力を生んでいる。私たちは、巨大な世界システムの前でただ無力な存在である。市場という幻想を通して相互扶助を可能にしていた信頼の網の目は、次々と悲劇を連鎖していく。報復は、新たな憎悪を生み伝達されていく。これは抑圧と矛盾の社会構造である。テロリズムと言うリスクを囲い込もうとするマネージメントは、一方で新しい形の憎悪とリスクを再生成する。世界市民社会による社会正義の制度は、市民の手の届かないところで強権的にその連鎖に対処し、また新たな偏見と権力を生じていく。９・１１の悲劇を巡る一連の事柄は、リスクに関する認識と対応の相違における無限の循環を象徴しているように、私には思えた。

テロをめぐる悲劇と報復の影で、アフリカの辺境の村々では、毎日 WTC５棟にあたる１４０００人もの命がエイズの犠牲になっている。貧困、暴力、差別、飢餓など、個人には対処不能な外的脅威に怯える生命は計り知れない数になるだろう。私たちの幻想の世界システムは、一方で過剰な反応を示しながら、他方では情報選択的に無関心を決め込んでいるように思える。私はこの既存の価値のシステムに、一方的な権力の構造と絶対的な恣意の存在を感じざるを得ない。ここに何等かの社会正義を見出すことは困難である。いったい私たちの社会はどこへ行こうとしているのだろうか？

２．健康リスクマネージメントと社会構造

予防医学における健康管理の研究には、そのリスクの基盤となっている社会構造的を分析することが求められている。「その社会にとって何がリスクなのか」「その社会は真にそのリスクのマネージメントを求めているのか」このような問いを、私たちの認識文化の中で再構築する必要がある。欧米から発信されるリスク管理の概念、技術を、その社会文化的基盤を考慮することなしに、そのまま適応することは非常に危険である。これは、「危ないから飛行機に乗らない」という人と「飛行機は便利だから乗る」という人の個人的なリスクの許容性の相違を、日本という社会全体に制度化して演繹するための必要最小限の倫理である。リスクマネージメントを制度化、法制化して強要する場合、たとえそれがどんなに科学的な検証で裏づけされていたとしても、そのリスクを語る正当性を、社会全体の文脈の中で再構成する作業が必要であると言える。

米国社会における健康リスクマネージメントの発展は、それを求める社会文化構造に大きく依存している。ひとつはカント以降の理性を中心とした実証主義である。正しい推論と検証によって得られたデーターは、科学的根拠として、社会的、文化的な背景とは無関係に「真」である、という西洋合理主義的態度である。これによってアカデミズムの舞台では、研究の対象化、バイアスの排除と試験の標準化、実践に焦点があてられる。豊富で緻密なデーター集積・解析とその実証的な検証作業によって、特定の疾患や危険因子が同定されていく。特に健康リスクに関しては、理性的な心身二元論を基盤に、身体を一つの調節機能メカニズムとして理解する傾向にある。健康リスクは、身体を科学的に対象化することによってコントロール可能だ、とみなすのである。近年の臓器移植、遺伝子操作の進歩は、これら科学的実証主義の頂点にあるように思われる。

もう一つの大きな流れは、「最大多数の最大幸福」「倫理的社会正義」を基盤とする、公衆衛生的な予防統治に関する功利主義である。ベンサム、ロールズ以降、この統治の理論は、多民族国家、膨大する医療費、多発する犯罪、医療

訴訟の増大などを背景に、社会の幸福と個人の幸福との調和を社会正義として制度化するための倫理的な根拠となった。特に米国では、貨幣価値への還元を目的としたコスト―利益分析(cost-benefit analysis)や、到達目標への還元を目的としたコスト―効果分析(cost-effectiveness analysis)に力点がおかれる。無制限に膨大する医療費により、また日進月歩の技術進歩における新しいリスクの出現に歩調を合わせる為、統治のシステムの正当性がこれらの文脈で説明されることが主流となっている。病気の未然の予防は、疾患に罹って治療を受けるよりもはるかに社会的コストが低いという観点、または寿命の延長や死亡率の低下と言った数値目標的な視点から、多くの予防健康活動、健康増進運動が提唱、実践されてきている。

多くの移民を受け入れながら、経済的、警察的権威として世界を席巻する自由と正義の国アメリカでは、実存主義的生き方や自由・平等主義的な民衆の欲求との葛藤のなかで、リスクを民主的に再構築する動きも強い。しかしながら全体的な合意といった意味で、リスクマネージメントの制度化、法制化は、普遍的な認識基盤としての実証主義、功利主義的な判断が重要な位置を占め、国民も「生きる権利」を与えられながらこのことに納得しているように思われる。

３．健康リスク研究の多様化

これらの背景を受けて米国では、官民ともにリスク評価と社会行動学の気運が高まり、1969 年ワシントンに NSF Technology Assessment and Risk Analysis Group が設立された。その後、核開発、遺伝子操作、新薬の開発といった先端技術への予見的リスク評価とその開発の倫理的正当性の検討を求める要求が高まり、急激にリスクアナリシス、リスクマネージメントは発展した。リスクは経済的、科学的進歩によって拡大解釈されたと言える。現在では様々な大学、国家機関、民間調査会社などにおいて、ビジネス分野、医療分野、環境分野をはじめとする幅広いリスク調査・研究が行われている。

私が在籍していたハーバード公衆衛生大学院は 1922 年に設立された。リスク分析に関してはそれまで学科間で行われていた研究が近年センター化され、1987 年に Injury Control Research Center （事故、銃火器、アルコール、家庭内暴力などの分析）、1989 年に Center for Risk Analysis （医学テクノロジーの経済的評価、事故のリスク評価、環境工学、食品安全と食品生産技術の評価）、1992 年に Center for Prevention of Cardiovascular Disease、1994 年に Center for Cancer Prevention、が設立され、また Center for Prevention Research（学童保健、栄養改善）をはじめとする全１３学科、１８研究部門で公衆衛生を軸に学際的アプローチが行われている。多くの部門が CDC、FDA などの国の機関と連携しており、

健康リスクを政策面、経済面、医学面、倫理面にわたり多角的に評価・研究している。これら米国の歴史的変遷を見ると、社会の多様化と技術の先端化を反映して、アカデミズムが専門、分化していく過程が良くわかる。

私自身はその後、専門分野を医療人類学に移し、ロンドン大学東洋アフリカ大学院でアフリカの医療システム、予防医学、感染症を、社会学的、人類学的な視点から再構成することを試みている。これは公衆衛生的アプローチとは視点が異なり、病と人のあり方を、医療の文化的、社会構造的、認識学的側面から検討するものである。人類学的な取り組みでは、リスクは科学的実証によって「発見」される歴史的産物であり、それを内包する社会文化構造の表象である、という視点から、リスク成立における認識論的な過程を社会文化的に構築することに力点が置かれる。そしてリスクマネージメントの背後にある制度的な権力関係、リスク表現の信用性や隠喩、科学的合理性の正当性などの解釈を中心課題としている。これら人類学的なアプローチは、リスクに人間の顔を見出す作業とその意味付けである、と言えるかもしれない。このようにリスク分析とそのマネージメントは、社会構造の急激な変化から生ずる要求によって、多様性を主体とする学際的な取り組みに変化してきている。

４．健康リスクマネージメントと文化

リスクを語る文脈は、欧米諸国においてさえ、国ごとに若干のニュアンスが異なるように感じる。米国では、「小さな国家 minimum state」を求める国民感情と自己決定権を前提とした契約社会を背景に、リスクは分散、周辺化しており、個人的責任と企業責任においての自己追求の形、または健康への投資という形をとっているように思える。英国においては、植民地主義的な統治の概念と社会福祉的な国家責任の歴史的背景から、個人のリスク管理は大きく国家に依存する形をとっているような印象を受ける。また私のフィールドである東アフリカでは、リスクは「超自然的、象徴的なロジック、集積的な社会知識」として、これら欧米の認識と全く異なる理解がされている。リスクが個人の認識文化と深く関わっているために生じるこれらの相違は、歴史的、宗教的、経済的、社会構造的な背景を同じくする社会集団において、認識に一定のパターンが存在することを暗示している。それでは私たち日本人は、リスクをどのように認識しているのであろうか？人類学的研究の主眼もここにある。

私たちはリスク研究の主座が欧米に偏っている現状を踏まえて、ここから発信される情報には一定のバイアスがかかっていることに注意しなければならない。欧米から発信される「リスク」「安全」の情報は、すでに自国の文化的、社会的な基盤を元に語られていることに留意し、その背後にある潜在的な意味を

汲み取る努力が求められている。先進国から発信される疫学と生物研究を基礎とした「リスク」は、文化的に異なった社会では全く違った意味に解釈され、その制度化をめぐって相互的に齟齬を生んでいることを、私自身アフリカの臨床で経験的に学んだ。

このことは日本の現代社会における舶来の「リスク」という概念と、そのマネージメントの適応をめぐる議論でも見受けられる。最近では、遺伝子組み替え食品、BSE 狂牛病を発端とする議論にその一端を見ることができる。私たちに求められているのは、真にリスクと言う文化が私たち日本の社会において何を意味しているのか、そしてそれが真であるのなら、日本社会の構造性、文化性を配慮した形でどのようにコントロールできるのか、どのような制度で日本型マネージメントをするべきなのか、といった省察的な議論が今後必要となるであろう。「安全神話」とか「リスク管理社会」といった言葉の背後にある人々の希望や抵抗を読み取り、それを私たちが置かれた文化、風土の中で意味付けていくような試みが求められている。

学生時代に経験した死の臨床をめぐる議論、近年の脳死をめぐる議論、また外科医として日常診療の中で私が気付かされたことは、「医療は文化である」という感覚であった。医療者の側にある、科学的、制度的なリスク。一方で、一般の人々の側にある、自分自身のみならず家族や共同体の生命が凝縮されたリスク。この両者の間には、管理する側の世界観と個人の実存としての世界観の、埋まる事の無い深い溝があるように思える。９・１１の惨劇は他人事ではないのかもしれない。

自然科学および社会科学は、人々の可能性を最大限に発揮できるよう社会を改編していく作業である。これは極論を言えば、死の乗り越えへの努力と言うことができるだろう。リスクマネージメントはその死への予見的回避であり、飽くことなき探求心である。しかし現代社会においてこの努力は、生命科学の進歩と世界システムの覇権との間で揺らいでいる。生命と幸福を重視する現代の福祉社会は、一方で自らの統治性を肯定するために制度的に「生きる権利」を与えながら、他方でそのモデルに適しない人たちを「リスクグループ」として排除し、差別と死をもって報いてはいないだろうか。そしてこの「生かす権力」は、外からの制度として機能しているばかりでなく、内部でお互いが監視しあうような自律的な権力構造となっていないだろうか。科学的進歩と民主的市民社会が人間の幸福に寄与するはずである、という仮説の実証過程が、無意識のうちに、人と人との信頼関係の構築を疎外しているように思える。相互の対話と理解が不能なまでに膨大している私たちの現代社会。今、私たちは大きな分岐点に来ているのではないかと感じている。

５．終わりに―新しい健康リスクマネージメントの摸索

市場と情報のグローバリゼーションは、必ずしも円滑な相互のコミュニケーションを可能にしているわけではない。現代情報社会では言語と言う記号の情報交換のスピードと効率に力点がおかれ、人と人が言葉を汲みかわす際の心理的な機微を排除する傾向にある。コミュニケーションがこの協調と調和の感覚を捨てきったところで、新たに無差別な暴力や差別、偏見を生み出していると言えるかもしれない。価値の多様化や相対化と言われる現代社会は、無関心と権威的覇権が隣接しながら拡張を続けるように、全く異質の価値システムが、併存ではなく横断的に支配しているような構造を持つ。それは空間、世代、制度、言語、メディア、身体表現、教育、文化、宗教など、さまざまな構成要素からなる多様なネットワークである。９・１１の悲劇やアフリカのエイズ問題などは、端的にこの現代の社会構造を象徴しているように思える。

リスクという概念は普遍的な存在ではなく、文化的、社会的な基盤を持って存在しえる個々の認識の概念である。欧米来のリスクとアセスメントは、グローバリゼーションとして語られる科学の実証性、市場の合理性、統治の功利性などによって意味付けられた、一つの説明体系にしか過ぎない。従って、これらの文脈で語られるリスクの概念を、各々の社会文化的背景において再考することが、多様化したグローバルな日本社会に求められているように思われる。

そういった意味で、これからの日本における健康リスク管理の理念は、日本という文化的、歴史的な社会構造に整合性を持ったものでなければならない。そしてリスクの制度化は、個人の幸せと人類の繁栄を、両義的に意味付けることが必要となるであろう。さらに、環境や生態系、世界システムを考慮に入れた未来の健康リスクのコントロールは、人と人との対話的コミュニケーションを保ちながら、国家や文化と言う枠組を超えた形での新しい定義と分析が求められている。それは静的なモデルから、変化に対応した柔軟かつ動的なモデルである。２１世紀の健康リスクマネージメントは、エコシステム、世界システムの中での日本的健康リスクの位置付けを明確にした上で、包括的かつ動態的なフレームワークを考慮していかなければならないと思っている。

今回私は、JSRMPM の発足に寄せて、健康リスクマネージメントに求められる新しい方向性として、リスクにおける「社会構造」と「文化」という一般的な話から、私が取り組んでいる人類学的、社会学的な考察を含めた新しい健康リスクマネージメントの枠組を話題として取り上げてみた。時間的、空間的な変化に富んだ現代社会を前提に、私たちには、新しいパラダイムへの理論の構築と実践の努力が求められているように肌で感じている。

６．参考文献

Adams, J.:

1995 *Risk*, London, UCL Press.

Caplan, P.:

2000 *Risk Revisited*, London, Pluto Press.

Derrida, J.:

1980 *Writing and Difference*, Chicago, University of Chicago Press.

Douglas,M.:

1986 *Risk Acceptability According to the Social Sciences*, London, Routledge.

1992 *Risk and Blame*, London, Routledge.

Douglas,M. and A. Wildavsky.:

1983 *Risk and Culture*, Berkley, University of California Press.

Foucault, M.:

1970 *The Order of Things*, London, Tavistock.

1973 *The Birth of the Clinic*, London, Tavistock.

Giddens, A.:

1991 *Modernity and Self-Identity*, Cambridge, Polity Press.

Harbermas, J.:

1984 *The Theory of Communicative Action*, Boston, Beacon Press.

1988 *On the Logic of the Social Sciences*, Cambridge, Polity Press.

Kuhn, T.:

1962 *The Structure of Scientific Revolutions*, Chicago, University of Chicago Press.

Parsons, T.:

1964 *Social Structure and Personality*, London, The Free Press.

1971 *The System of Modern Societies*, Englewood Cliffs, New Jersey, Prentice-Hall.

Rawls, J.:

1971 *A Theory of Justice*, Oxford, Clarendon Press.

Sen, A.:

1980 *Information Analysis of Moral Principles*, In *Rational Action*, R. Harrison (ed), Cambridge, Cambridge University Press, pp.115-132

Sjoberg, L.:

1987 *Risk and Society*, London, Allen & Unwin.

Wallerstein, I.:

1974,1980, 1989 *The Modern World-System I, II, III*, San Diego, Academic Press.

1991 *Unthinking Social Science*, Cambridge, Polity Press.